

---

巴 ~Tomoe~

K-hell

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巴～Tomoe～

### 【NZコード】

N87740

### 【作者名】

K - heel

### 【あらすじ】

宝来瑞希にはある噂があつた。その彼女から相談を受けてしまう雄飛。そして彼の退屈な日常は終わる。二重人格少女と普通の少年の物語、第一章。

和中28年高度経済成長期「日本」。2度に渡る東西大戦から奇跡的に復興した平和の象徴であるこの国だが、『警察派』と『貴族派』と呼ばれる旧封建制時代からの2大勢力が武力を交えることなく水面下…いや目に見える形でマンネリ化した争いをしていた。

まあ日常に大事件と呼べるものはほんなく、人々が「自由だあ！」と叫ぶる平和ボケ進行中のご時世である。俺はこの怠惰極まりない日常の解説者だ。そしてその他大勢に分類されるような一人の男子高校生だ。

別にクラスメートの女子の一人（？）「宝来瑞希」<sup>ホウライミキ</sup>に対してもしない思いがあるわけでもなく、というか寧ろあいつ（ら）が俺をいつ解放してくれるのかと超気長に待ち続ける身だ。死なない程度に世の中を生きていきたい。そつそく、まつたり行こうか。

女王と奴隸> 俺が中学の時に生まれて初めて抱いた違和感は怠惰な日常に対してだった。世間の一部を騒がせる警貴抗争も一般人の俺にはどこか遠いものだったが、その両派の子供が手を取り合つて学校生活を送るシステムはおかしいだろう、こん畜生とおもつたわけである。

まあどうでもいいことだがな。そんなことより俺はまだまだ童心を忘れず、富士山が爆発したり、首都圏にUFOの大船団が現れたり

しないかと杞憂に努めていた訳だつた。

ともかく俺の好奇心を掻き立てるものが、この大都会にはなかつた。こんな息の詰まる都會にいたら、超一流の大学に入つて卒業し超一流の企業の雑用に追われるような詰まらん日常サイクルが閑の山だと中々にして悟つてしまつた。

ここには頭のいい人間が多いが好奇心が多い人間はない、というのが俺の持論になつた。当然そんな異端者は世間から冷たくされ、受験ノイローゼで駄目人間にされた。<sup>スポイル</sup>俺は本格的に脳が逝かれる前に東北という未知の世界に降り立つたのであつた。

無事に地元県立中高一貫校に編入して、高校進学試験もパスした。その頃には俺の奇行も減り、友達と呼べるやつらが何人かできていった。しかし、訪れた春は稻妻のように激しかつたのだ。ああ間違いない、あいつらが俺の前に出現した例の春がやつてきたのだ。

ハハハ・・また寝ている。でも、しつかりシャーペンだけは動いていた。まだその「睡眠學習少女」の本性を知らない阿呆の春だつた。俺は向こうの席で寝ている彼女の寝顔をチラ見して心の中でｗｋｔｋしていた。

しかしここは数学特進講座だつたはず…といふか、俺はクラスメートである「眠り少女」を数学の時間しか見かけなかつたのだ。そんな些細なことを放置し、俺はペンを回しつつ一次関数の難問様と戦

うのが日常化した頃だったらしい。

ある日下がり俺が揺り椅子をしてみると、ドライモンのよつたな体躯の某友人が何故その話になつたか考えたくない（どうやら俺の記憶から抹消されていた）が例の「眠り少女」の噂を緩いトーンで始めた。

「ユウヒは『宝来伝説』を知らねえらしいな。お前どんだけマニアな潜りだよ。数学の時間中、あいつにガン飛ばしてんの知つてんぜ。悪いことは言わん、止めとけ」

読んでいた週刊誌が手からドボン。恥ずかしさの余りリアルにどもる。

「ば…馬鹿、んな訳ねえよ…って、ただ彼女の寝顔を盗み見て萌えているだけだが」

ドラは憐れむような目で俺を見る。痛い視線はもう勘弁だ。

「そつじやねえって。B組のサッカー部のかつあんを知っているか？あいつ今入院中。たまたま通り掛った悪女宝来にボレー シュートかましてしまったらしい…謝ろうとして近付いたかつあんは、ボールと一緒に血の池地獄になつたらしい…おお、ガタガタブルブル

ボールは友達、そりやお陀仏様。気の抜けたドラが語ると全て喜劇になる。俺は実際にした事実しか信じないんでね。

「曹司雄飛くんですか…」

近くで俺の名を呼ぶのは、まさに当事者「ホウライさん」だった。猫毛の長い髪の少女は、すでに涙田。ああ同じクラスだったのね…。昼休みの憩いの教室に戦慄が走る。ドラは白田昇天。俺は冷静に答えた。

「やうだけど何か?ついでにドラが…」

「どうぞ、『ゆつくりいい…』

ドラ逃走。やれやれ、何気に俺も逃げた主犯の肩棒<sup>バカ</sup>担いでいたからバツが悪い。白を切るとするか。

「いじめの相談なら組担任までどうぞ。ノートのペーパーは一時間あたり5円になります」

バイトの能力は不発だった。それもそのはず彼女の爆弾発言だ。

「あ…の、付き合つてください…」

フラグ乱立！？事態は俺の手に負えない方向に。啞然とする俺に彼女は弁解の言葉を述べた。

「ち、違うんです…相談したいことがあります」

そんなキリッと白昼堂々言われても俺が混乱するだけだと思わんか。しかし、断る理由が特ない。この時の俺は明らかに選択肢を間違えていた…ああの頃の俺は何て紳士なんだ。

「いいよ、じゃあ放課後な」

責任を取るのが男の本分と思っていたのかもしれない。ホウライさんは「ありがと」ただけ言つとフラフラ教室を出て行つた。ホウライさんの目が、腫れている上にどこか寝むけうな目をしていたと思う。

教室中が何故か歓喜する中、俺は「後5分で休み時間終わるぞ」と冷静に思った。例のかつづあんの友人は俺に木製バットを手渡し言った。

「死んでくれるなよ（笑）」「

敬礼。俺は戦地に行くジャーナリストじゃねえよ……おののまき口の俺は愚かにもそう語つた。

学校近くの喫茶店に着いてから彼女の様子はどこか変だった。時折、眠たそうな素振りを見せる。

「コーエーが悪戯に冷めるだけ（時間的意味で）」俺は相手から話が切り出せそうないと空気を読んだ。仕方ない、まずは俺から始めるか。

「学校でよく耳にする『ホウライ伝説』って何なんだ？」

彼女は眠気が飛んだよつて顔を真っ赤にして否定する。…が何か変。

「ち、違うの！私はミズキがやれって言つから仕方なかつたの

不審全開、俺発動。

「それは『あなた』でしょ？」「

世間が許しませんよってね。彼女は顔を両手で抑え、涙ながらに自白した。しかしその内容は、常人が一回聞いてもわかるかわからなかいだ。彼女の問題は複雑でその手の専門家が必要だつた。

「二重人格…？」一人の人間の内に全く異なる一つの人格があり、交互に現れること。「？」一人の人間がある時期から全く違った性格を示し、過去の記憶を失うこと。（広辞苑より抜粋）

彼女は？に当たるらしい。そして自分がミズキの副人格であり「巴」<sup>トモ子</sup>という女武人であると名乗つた。

「で…俺にどうしろと？残念ながら俺は精神科の名医じやないんだ」

トモエさんは身を乗り出した。何か熱い女<sup>ヒト</sup>だな…軽く身が引けた。

「ミズキと仲直りしたいのじゃー！」

姫口調？ああ今まで気遣つてくれたのか。ここまで来て俺はトンデモナイ爆弾を拾つたぜ、やれやれと思った。ちょ…マテマテ、そんな目で見つめるでない。初めから俺に選択権なしかよ！

「貴方は彼女<sup>ミズキ</sup>を知つてゐる…」

ああそう言えれば、何時だけか駅で見かけた…っておい、女の涙の泣き落としは『反則技』だろ？。進退ここに極まり（溜息）。

「ええと、分かりました…何とかしましょ？。ただし、俺にできるのはあくまでも『喧嘩の仲裁』です」

頷いたかのようにガクッと彼女の身体が揺れた。TVで見たことある光景…ああ除霊シーン。おい、職業経験値的意味で不味くないか！！彼女の目の色が変わった。俺を睨みつける小悪魔的視線から明らかな邪念を感じるぞ。

「男なんてちょろいものね。トモエに舐められていたのよ、あんた馬鹿なの？」

俺は一瞬マジ焦つたが、2人の言い分は違い過ぎると気付いた。釣り橋を叩き壊す勢いで脅してみた。策士、俺発動。

「へええ…俺は最初から信じちゃいなかつたけどな。店の中はどうしようがお前らの勝手だぜ。それにお前がトモエさんとやらを自演している可能性も否めない。俺のフィールドで闘うのを選んだ馬鹿はお前だ」

やばい…バットをドラに預けてここに持つて来なかつた。俺、死亡フラグ！？しかし、ミズキはハッタリが要らない無垢な少女だつたのだ。場所を忘れて泣き喚きやがつた。

「トモエは私じゃないのー私に絶対忠誠を誓つ僕なんだからーーー」

ああ成程、話が見えて來た。この一人とおくと互いに相手を怖がっている。互いのこと知ろうとしないでいるから、周りに迷惑かけて繋がつた振りをしていたんじゃないか。

似た例はいじめグループの仲間意識だ。「誰かを傷つけてまで仲間意識を確認すんじゃねえよ！」と言いたいところだが、それじゃ問題は解決しない。

「じょへ僕とか言つている内、お前ら2人は絶対分かり合えない。お2人さんには対話路線を提供するぜ、やれやれ」

「うん、分かった…」

彼女は立ち上がりぎこちなく頭をさげ店を出て行つた。あれ…俺つてトモエさんの悩み相談していたんじゃないつけ。独り残され何しているんだろう。そうしていると男の店員さんが温かいコーヒーをサービスで出してくれた。

「辛いでしょうかけれど頑張つてくれださい！！」

別れたカップルの鬭いに見えたのか。いや、かなり間違つてないか。そうか、AKYか。俺は白河の閑を越えて独り暮らし、貧乏性が身についたのでサービスはあえて拒まないぞ。しかし何故かコーヒーがほろ苦い…とか、ブラックだった。

AFTER> 僕が振り椅子をしなくなつた話をしたい。麗らかな春の日差しが教室に降り注いでいた。時刻は昼下がり、ドラはじやんけんで例の如くグーしか出さないので、今日も購買ヘパシリだ。振り椅子で校舎の外を眺める俺に魔の手が迫つていた。

「座り方注意、ていや！－」

ミズキの足払いが汚い教室の床に思い切り尻もちを着いた。痛つてえな、おい何しやがる！－ただのいたずらだったら未だに俺は振り椅子世代だった。

少女あどけなさが残る大きい目が春の日差しの下で笑う。うほっレア顔、ラッキー。おいしい思いをした俺の嫌な予感が的中した。

「トモエとね、ちゃんと話したよ。ようしく私の下僕？」

駄目だこいつら…早く何とかしないと。俺が「揺り椅子を好んだ事実」は記憶から削除された。

▼田(2)にづくへ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8774o/>

---

巴～Tomoe～

2010年11月19日21時23分発行